

□ 脈導

三日前

「配属先が変わった？」

訓練活動後の疲れた体をベッドに横たえ、通信端末に映る女性を見やる。
『うん。明々後日にそっちで大規模な演習があるでしょ？ だから研修を兼ねて様子を見て来いって言われてさ。これでトオル君にもまた会えるね♪』

俺、近衛トオルは半年前に『魔法』に出会い、紆余曲折を経て今は『昏きソラ』地域の見習い軍人になっている。『昏きソラ』と呼ばれるのは、ここが年がら年中曇り空だかららしい。

「馬鹿。俺がお前と会ったりしたら疑われるだろ」

「疑われるって、何を？」

「これでも一応諜報任務中なんだぞ、俺」

「あ、そうだった。忘れてた、テヘ♪」

「テヘ♪ じゃねえ！」

そう。見習い軍人はあくまでここでの役割にすぎない。自分と通信の相手——楓コノハの所属している会社(名前はまだない)からの命により俺は、この『昏きソラ』地域でスパイっぽいことを行っている。

『でも実際には何もしてないんでしょ？』

「言うな。派遣されただけのヒラとか言うな。形骸化してて実質ニートとか言うな」

『そこまでは言っていないよ。というかそんなこと言うのは自覚してるんじゃない？』

「ぐぬぬ……」

ここに派遣されてからそれらしい事をした覚えは皆無だ。自覚するな、という方が難しいだろう。

『じゃあね。期待してるよ、三日後』

そうやって通信を終了したコノハは玩具を期待する子供のような顔をしていた。

「まったく人の話をまるで聞かねえな。相変わらず」
明かりを消す。机の上の小包をぼんやり眺めながら意識は薄らいでゆく。

〈トウー・フライ〉

「人は空を飛べない」

そうだろうか。私はそうは思わない。

「人は本当は飛べる」

では何故飛べないのだろう。私はそう思う。

「人は羽ばたくのが怖い」

だから、私は思う。

「人は空を飛べない」

二日前

明後日からの休暇を与えられた。

「ふあ？」

と間抜けな声をあげる俺に我等が上官サマは気合入れの平手打ちを添えて教えてくれた。

「カクカク地デジ化」

「さーいえっさー！」

上官サマは言うだけ言うと言とサツサと何処かへ行きなすった。

「よくわかりましたとも。説明する気無いんですね」

明後日から休暇らしい。理由は解らんがな！

まだヒリヒリする頬を押さえながら宿舎に戻る。リノリウムの床が自分の足音を無闇に響かせる。まだ夕方だというのに静かなものだ。

「明後日って演習だな。そういえば」

諜報員としての仕事なんてまるでしてなかったために、今まではひたすら訓練に明け暮れていた。まともな休暇はこれが初めてかもしれない。

「ちようどいい、か」

彼——近衛トオルは無数の黒い人影とともに忽然とこの世界から消えた。おかげでこの事件の犠牲者は最小限に留められた。だけど、その事実を知っているのは私だけだ。誰も彼の偉業を讃えはしない。彼が、守ったモノに認知されることはない。

そのまま何時間座っていたらろう。もしかしたらほんの数分のことだったのかもしれない。突然インターホンが鳴った。無気力に立ち上がリドアに向かう。

「お届け物です」

「あー、はい。ありがとうございます」

部屋に戻るとすぐに開封にかかる。なにか作業していないとそのまま体が動かなくなる気がしたからだ。

中には一つの小包と缶、そしてメッセージカードがはいっていた。とりあえずメッセージを見てみる。

『お誕生日おめでとう』

「……！」

食い入るように続きを読む。

『直に渡すのは恥ずかしいからこうして手紙で伝える。俺は、お前が好きだ。コノハのためなら命も惜しくない。

どこがどう好きとかそういうことは直に伝える。以上』

『追伸 プレゼント気に入ってくれると嬉しい』

嬉しかった。嬉しくて嬉しくて漸く——涙が出た。片方からしか雫は流れないはずなのに、何故だか喪った左眼の血脈に彼の魔導の流れを感じる。

このときやっと、私は近衛トオルの死を理解した。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

小包の中には片眼鏡があった。どうせ見えない左眼に掛けておくことにした。

打ち合わせる相手のいない缶ミルクティーが開けられることは、ない。

● 日前

「今日からあなたの相棒パティになりました」

「は、はあ……」

「あ、すいません。名乗ってませんでしたね」

「私は楓コノハ」

「僕の名前は、近衛トオルと言います」

③ 「情導」に続く